The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	老年期と攻撃性
Author(s)	隣, 祐理子
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 1996, 1, p. 19-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9779
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

老年期と攻撃性

隣　　祐　理　子

はじめに

人間が生まれ、成熟し、老いて死ぬ中で常に心と体は影響を及ぼしあっている。心の疲れは体の疲れと関係し、心の変化は体の変化と関係する。よって心の健康や発達について考えるとき、体の健康や発達とのアナロジーにおいて考えるのは必然的であるとも言える。例えば加齢に伴って老年期に体力が落ちてゆくのは人生の中での自然な変化であるが、それと同時に「精神的な力」も下向きのカーブを描くのではないかと推測される。人生を川にたとえると、老年期は河口に近く、持て余すくらいの時間を自由に使えるような「穏やかな」時期に見られる場合もある。しかし数年前になろうか、ゲートボールに使う用具の見栄の張り合いから起きた「ゲートボール殺人事件」が新聞を賑わせ、我々の、老人に対する表面的な印象を覆すような事件があった。また、老人ホームでも、上下関係やいじめなどがあるという話も聞く。

これらの事から改めて考えてみると、老年期とは精神的・肉体的能力が衰えてゆく中で自分の人生経験に照らし合わせて何とか精神・肉体的な能力を駆使し、人生の最終課題である死に向かって個性化の道を辿り続ける坂道であるとも考えられないだろうか。

こうした観点から、老年期におけるパーソナリティーの変化を取り上げ、次いで「生きる力」とも考えられる攻撃性と老年期について述べる。

1．加齢によるパーソナリティーの変化

まず加齢によってパーソナリティーのどの部分が維持され、またどの部分が変化するのか。まずその安定的側面は、個人が生涯を通じて特定の環境を選択し、特定の方法で認知していく部分に関する部分であるとされている。Costa & McCraeは実証的研究を通じて、神経症性(Neuroticism)、外交性（Extravesion)、開放性（Openness)の3特性が加齢を通じて最も安定しているとし、後に協調性（Agreeableness)と誠実性（Consciousness)もそれに準ずるとしてこれに加えた。反対に加齢によって影響を受け易いパーソナリティーの側面は、以下の4つの原因が大きいとされる（佐藤、1995)。

①心身機能の低下

高齢化によって心身の柔軟性が低下し、思考や性格面での堅さ（rigidity)が目立つようになる。これによってわがままさや頑固さといった自己中心的側面が表れるようになる。また感覚機能の低下によって認知能力が低下し、猜疑心が強くなる者もいる。更に記銘力や学習能力の減退により、保守的になったり、創造力が低下したりする。またこういった心身機能の変化によって依存性が高まったり、過去の生活に注意が向く余り悔やみや愚痴などが多くなる傾向がある。

②社会的つながりの喪失

これには職業上の社会的地位の喪失、子供や配偶者との別れ及び死別、家族における父親や母親としての役割の喪失などが含まれる。一般的には内向的な方向に向かう傾向が認められるが、人によっては抑うつ的になったり、精神的成長を遂げたりと様々な方向への変容が見られる。

③老性自覚

これには五官の能力の低下など身体的な徴候から老いを自覚する「内からの自覚」と、社会的環境の変化や物忘れが激しくなるなどの「外からの自覚」が含まれる。ここで佐藤（1995）は「老いを自覚するきっかけが、皆ネガティブな意味合いのものばかりであることが問題である」としている。

④死の接近

死が近付いてくることの自覚は老年期において誰でも持つものであるが、死は人間にとって不可解なものであるため、この自覚の高まりにつれて不安も増大する。この「死」という現実への立ち向かい方は人生の終末期に大きく影響を及ぼし、高齢者のパーソナリティーにも影響する。

これらの様々な変化は高齢者が過去の人生で個人が享

受してきた様々なものを失う過程であるともいえる。失うものとしては、地位、収入、健康及び活力、配偶者・友人及び仲間、自立した生活、慣れ親しんだ空間、性的価値、自己の生命、と多岐に渡っており、これらの喪失は、いずれも人間の存在を揺さぶる事象である（清水、1994)。こうした特徴から老年期はしばしば「喪失の時期」と表現される。

しかしまた、喪失による影響に個人差が大きく見られるのも老年期の特徴である。桜井（1985）は、喪失に伴う不安について「喪失があるから不安になるのではなくて、喪失に対してどのように対応するかという主体のなかに不安ができるのであろう」と述べ、個人の主体的対応のあり方の重要性を指摘した。また、RyffはAllportの成熟したパーソナリティーの基準などを吟味し、老年期への適応において重要なパーソナリティー特性を6つにまとめた。それらは、①自己受容　②他者との肯定的・積極的関係の維持　③自律性　④環境の調整⑤人生目標を持つこと　⑥成長への意志があることである（Ryff, 1989)。

しかしこういった状態を保つには精神的・身体的・社会経済的資源が不可欠であり、事実上は何らかの形で不可能である場合が多いために、現在の一般的な「老人観」は暗い、寂しいなどといったネガティブな色彩を帯びているとも言えよう。それでは具体的に「不適応」とされる状態とはどういうものなのか。老人ホームなどの施設においては、特に攻撃的行動が問題となっている。これは直接ケアする側にとって困難が生じるためである。攻撃的行動には、徘徊、落ち着きのなさ、物を隠す行為や、扇動的（agitated)行為（大声で話す、食事や薬を拒否する、指示に従わない、不適切な場所での排尿など）といった比較的穏やかなものから、身体を用いた攻撃までが含まれる（Giancola & Zei-chner, 1993)。扇動的行為については、聴覚の喪失や見当識障害、自制心の欠如などに原因のある場合も考えられる、ただし、こういった行為が肉体的制限や疲労のために、高齢者が自分の怒りやフラストレーション、敵意などを表現する唯一の方法である可能性を考える必要がある（Giancola & Zeichner, 1993)。

また、家庭においては家族主義的価値観をもつ高齢者が、家族に対して攻撃的になるという形で葛藤を起こすという場合がよく見られる。現代では価値観の変化が激しく、親子や夫婦の関係の変化も著しいこともその原因の一つである。しかし、特にこのような関係の問題が深刻化してくるケースには、その高齢者の過去の発達段階から引きずられている問題が顕在化していると見られる場合が多い（中村、1990)。

2．攻撃性（Aggression)の発達的考察

それでは、攻撃行動及び攻撃性は、老年期に至るまでの過程で、どのような変化が見られるのであろうか。

まず子供の攻撃についての発達的研究は、Erikson（1959）とPiaget(1928, 1932）によって初められた。Eriksonは、発達的変化をもたらす中心的な軸となるものとして、争いを3つのレベルに分類した。それらはまず、子供の人格と両親の要求との間の争い（葛藤)、第二に心理・社会的発達危機と名付けられた心的な内部に起こる争い（葛藤)、第三は適応形態の間における争い（葛藤）である。Piagetは、葛藤は個人の運動や精神構造と、対象からの要求との間に適合性が欠けていることから起こるとし、個人間の争いが個人の内界での葛藤を発生させ、他者の観点に立つ能力を伸ばし、認知の発達がもたらされるとしている。また、攻撃が実行されるまでの認知過程についてDouge(1980）は、子供は攻撃行動を行う前に攻撃の正当性を判断していると考えた上で、6つのモデルで説明した。それらは、1相手の行動の知覚、2相手の行動のラベル付け、3相手の行動の評価、4自分の取り得る行動の探索、5自分の行動の評価、6行動の実行　である。これらの様に、ごく幼少期の子供における攻撃性の一側面は、認知や情緒的発達をもたらすものとして捉えられる。しかし、発達に伴って自己抑制や道徳性や愛他的行動が、直接的な攻撃行動に取って代られる。Kopp(1982）によると、2歳から3歳齢までの「自己統制の時期」になると、親が監視していなくても親の要求に沿った行動ができるようになり、また言い聞かせる事によって我慢して待てるようになる。3歳齢以降の「自己抑制の時期」になると、自己統制の時期よりも状況の変化に応じて適切な方略を使うことができるようになり、我慢する能力も増す。この時期においては欲求不満状況で泣くことが少なくなり、また感情の自己統制が進んでくる（Kopp, 1982)。

自己統制の力が獲得されるにつれ、社会的に洗練された形での攻撃行動が生まれてくる。これは、昇華（sublimation)という概念で一般的に知られている。Lorenzは、他人を傷つけないように文化的に儀式化させた攻撃行動がスポーツであるとしている（Lorenz, 1966)。しかし「永続的で全体的な昇華は、本能的衝動や置き換えなど自我の複雑な防衛ー適応の過程を経て達成されるもの」であり、昇華の典型は、個人のライフワークとしての職業活動にみられる（北見、1990)。しかし老年期になると、職業を昇華の手段とすることができなくなる。

3．攻撃性理論

1．で見たように、周囲にとっては迷惑となる攻撃的行動は、当の高齢者にとっては怒りやフラストレーション、敵意といった人間ならば誰でも持つような感情を解消する唯一の手段であったり、或いは変化してゆく価値観に対する抵抗と考えられるという事であった。この様な攻撃的行動は高齢者においてどの位見られるのであろうか。老人ホームにおける攻撃行動の出現頻度の報告は研究者によって7％から91％と大きい幅がある。これは、様々な攻撃行動が一つの行動として捉えられられており、それぞれについて詳述されていないことと、研究者間で異なった尺度が用いられており、その信頼性や妥当性の検証がなされていないことが原因であるという（Giancola & Zeichner, 1933)。これからも分かるように、攻撃行動は様々な範囲で捉えられられ、定義が難しい行動である。その理由の一つは、攻撃性という語の多義性にある。攻撃性という問題は、精神医学が、精神分析学、心理学、動物行動学、社会学などの近接領域との交流が盛んになった以後のことであり、従って攻撃性という概念は極めて多義的に用いることができるが、他方で概念上の混乱が起こり易いという難点がある（鹿野、1979)。例えば同じ攻撃という言葉を使っているとはいえ、攻撃性と攻撃行動は分けて考える必要がある。なぜなら攻撃性の高い人であっても、その攻撃性は必ずしも攻撃行動として表現される訳ではなく、また反対に攻撃的行動と見られる様な行動であっても、混雑時に誤って他人の足を踏む時のように、行為者の意図として攻撃性が関わっていない場合も存在するからである。幼児を対象とした研究においては、攻撃行動と内的な攻撃性の間の隔りが相対的に少ないと考えられよう。しかし高齢者の場合は、幼児を対象とした場合のように行動として現れる側面のみを見ていても、彼らの身体的制限や、経験による学習や良心からくる抑制が行動に大きく作用すると考えられるため、攻撃性の心理的な評価に妥当性が欠けると考えられる。

それでは、攻撃とはどのようなものであろうか。

一般的には、攻撃的行動とは怒りの感情の表現であり、破壊性をもった行動として捉えられるため、否定的な意味合いを持っている。しかし英語のaggressiveという単語には戦闘的という意味の他に、反対される事を恐れない、決断力がある、力強いという（Longman Dictionary of contemporary English)肯定的な意味もある。さらにaggressionの語源には「・・に向かっていくこと」という意味があり、関係の始まりとしての意味も持っているといえる。動物行動学者の日高敏隆は、同種個体間の関係であると社会関係に介在するものが攻撃性であるから、攻撃性がなくなったらこれら全ての個体間関係が消滅すると述べている。これが、生態学者　K. Lorenzから始まる動物研究の知見を取り入れた攻撃性についての観点である。動物が餌、縄張り、配偶相手などを廻って他の同種のものとの間で示す攻撃行動に関する研究から、Lorenzは攻撃を独立した内発的な本能エネルギーと考え、時間と共に貯蓄され、何かのきっかけによりいずれは放出される必要があるものと考えた。またStorr（1968）は、人間を含む全ての動物の攻撃行動が、攻撃性のはけ口となる対象を求める生産性をも併せ持つ本能の表現であるとし、人間として生きるのに不可欠な、独立心、自尊心、目標達成及び征服欲、知的活動なども攻撃本能の表現であるとした。この考え方にそうと、仕事や友人などを失いつつある高齢者の場合、攻撃として放出されるべき本能エネルギーが「向かってゆく」相手（人間とは限らない。職業など、活動の場所も含む）を失うため、老年期に至る前に比べてすみやかに放出されないという状況が起こっていると考えられる。

変わってFreudは、生物体は緊張から脱して完全に緊張のとれた状態に戻ろうとしているという人間観から、著書「快楽原則の彼岸」と「自我とエス」の中で、全ての細胞が性愛本能と死の本能を持っているという理論を提唱した。そして、死の本能の表現が他の性愛本能や自己保存本能によって妨げられた時に人間の攻撃性が現れると考えた。これに対してLorenzは、攻撃の本能も自然の条件下では生命と種を保持する働きをもつものだ（Lorenz, 1966）として反論している。

しかしこれら二人の考えに対し、E. Fromm(1900-1980）は彼らが「攻撃そのもの」と「破壊性・残酷性」を混同してきたと批判し、攻撃性の研究が「攻撃欲動の実体化」にのみ限定されていたという反省に立ち、行動の背後にある衝動から攻撃を分析するという方法を用いた。彼は本能については人間の生理的要求への回答であり、他方人間の性格に条件づけられた情熱は人間の存在的要求への回答であるとして区別し、本能によって引き起こされる攻撃性は防衛的であるがゆえに「良性の攻撃」であるとし、他方後者による攻撃を「破壊性」と考えて「悪性の攻撃」であるとした。つまり、非合理的な攻撃は合理的な攻撃が行えない場合の、いわゆる退行の逆形態となったものであり、合理的な攻撃を可能にすることにより悪性の攻撃は避けられないものではない、ということを強調した。

しかし、このように「攻撃性」を行動の動機から分析する考え方には攻撃行動の客体における判断が欠けている。このことから鬢櫛（1993）は、フロムの理論を乗り

越えるためにはまず、「主体と客体の相互行為を考慮すること」が必要であり、更に「主体、客体を超えた状況が紡ぎだす関係論まで目を配る必要がある」と述べており、関係の中で攻撃性を考慮することの重要性を述べている。

4．終わりに

老年期は様々な形で喪失を感じる時期である。社会、身体、精神的変化はおおかた喪失感を伴う経験となる。これらを受容し、かつ健康で幸福でいるのは非常に難しい。困難の一因は老年期において、攻撃性を発散させるような対人関係や、活動の場が失われてゆくという点にもあると考えられる。老年期において攻撃性そのものが失われてゆくという考え方もあろうが、老人を取り巻く様々な葛藤状況を考えてみると、攻撃性自体が失われてしまう事はないと考えた方がよさそうである。高橋（1985）は「無意識の内容が現在の行動を支配するという文脈で、攻撃性が演ずる役割は大きい。というのは、現代の文明社会では、人が率直に攻撃的であることがあたかも悪いことであるかのように感じられており、そのために攻撃性についての人々の自覚が妨げられているからである。まさにそれ故にこそ、攻撃性が症状になってあらわれたり、気付かぬうちに行動になってあらわれることが多いのである。悪いのは攻撃性自体ではなく無自覚のために攻撃性が心の中で野放しになっていることである。」と述べている。特に現在の高齢者が育ってきた文化には、「我を出す」ことや自己主張など、攻撃性の発散と関係する行動を戒める規範が強かったと思われる。よって攻撃性の自覚は非常にプリミティブであろう。よりよい老年期を過ごすためには、人との関係の中である程度攻撃性について自覚的になり、その吐け口先を意識的に探してゆくこと、また周囲の者が意識的にそれを手伝ってゆくことが必要であろうと思われる。

＜文献＞

馬場謙一ほか編　「攻撃性の深層」　有斐閣　1985

髮櫛　久美子　人間の「攻撃性」再考ー　フロム理論の効用と限界　名古屋大学教育学部　紀要（教育学科）40（2）49-58，1993

D．B．ブロムレー　「高齢者の科学」　産業能率大学出版部　1976

Erikson, E. H., 1959. Identity and the life cycle. Psychological Issues, 1. New York:International Univerdities Press.

Giancola, P. R. & Zeichner, A. Aggressive Behavior in elderly:A Critical Review Clinical Gerontologist, 13（2）1993

Kopp, C. B., 1982. Antecedents of self-regulation:A Developmental perspective. Developmental Psychology, 18, 199-214

北見芳雄　カウンセリング辞典 1990　誠信書房（「昇華」の項）

Lorenz, K. Z. 1966. On Aggression. Harcourt, Brace & world, New York

中村 雪江　老人の攻撃性　社会精神医学　13（3）　194-198, 1990

小田 晋　現代人の攻撃性についてーその古態心理学ー　心と社会78　1994

Ryff, C, D. 1989. Happiness is everything or is it? Explarations on the meaning of psychological well－being. Journal of personality and social Psychology, 57, 1069－1081.

桜井図南男　老人の不安　老年精神医学　2　358-364, 1985.

佐藤 眞一　老年期のパーソナリティーとポジティブな心理機能　高齢者のケアと行動科学　vol. 2　1995

鹿野 達男　1979. 1. 攻撃性研究のための一序論　原俊夫，鹿野達男（編）「攻撃性」岩崎学術出版

清水将之編　不安の現臨床　金剛出版　1994

高橋哲雄　（馬場謙一ほか編　「攻撃性の深層」　有斐閣　1985）第一章

（臨床老年行動学講座　博士前期課程２年）